

「基礎からスッキリわかる微分積分」(初版) 正誤表

	誤	正
p.ii, 1行目	なお, 証明については, 数学的な	なお, 証明 は は, 数学的な
p.iv, 中程	協同的な活動を創り出しやりぬく力,	協働的な活動を創り出しやりぬく力,
p.x, 中程	例えば, $r = 1$ とすると, 半径1の円周の長さは π なので 360° が 2π ラジアン	例えば, $r = 1$ とすると, 半径1の円周の長さは 2π なので 360° が 2π ラジアン
p.13, 図 1.2 の説明	x が $x \neq a$ となる a の近傍にあるとき, $f(x)$ は $f(x)$ の近傍内にある.	x が $x \neq a$ となる a の近傍にあるとき, $f(x)$ は α の近傍内にある.
p.14, 定理 1.9	$x \rightarrow \alpha$ のとき, $f(x)$ の極限值が α であるための必要十分条件は, 右極限值と左極限值がともに存在して α に等しくなることである.	$\lim_{x \rightarrow a} f(x) = \alpha$ であるための必要十分条件は, $\lim_{x \rightarrow a+0} f(x) = \alpha$ かつ $\lim_{x \rightarrow a-0} f(x) = \alpha$ である.
p.14, 下から 2行目	$x \rightarrow \pm\infty$ のときの収束	$x \rightarrow \pm\infty$ のときの収束・発散
p.17, 下から 5行目	$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ のとき, 下図において,	$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ のとき, 次ページの図 において,
p.18, 1行目	$0 < \frac{1}{2} \sin \theta < \frac{1}{2} \theta < \frac{1}{2} \tan \theta$ <p>である.</p> <p>よって,</p> $0 < \sin \theta < \theta < \tan \theta \implies \sin \theta < \theta \quad (1.6)$ <p>である. $-\frac{\pi}{2} < \theta < 0$ のときは $-\theta$ を上式に代入すれば,</p> $\begin{aligned} 0 < \sin(-\theta) < -\theta < \tan(-\theta) &\implies 0 < -\sin \theta < -\theta < -\tan \theta \\ &\implies -\sin \theta < \theta \implies - \theta < \sin \theta \end{aligned}$	$0 < \frac{1}{2} \sin \theta < \frac{1}{2} \theta < \frac{1}{2} \tan \theta \quad (1.6)$ <p>である.</p> <p>よって,</p> $0 < \sin \theta < \theta < \tan \theta \implies \sin \theta < \theta = \theta \quad (1.6)$ <p>である. $-\frac{\pi}{2} < \theta < 0$ のときは $-\theta$ を上式に代入すれば,</p> $\begin{aligned} 0 < \sin(-\theta) < -\theta < \tan(-\theta) &\implies 0 < -\sin \theta < -\theta < -\tan \theta \\ &\implies -\sin \theta < \theta \implies - \theta < \sin \theta \end{aligned}$

	誤	正
p.18, 図の角度	q	θ
p.19, 1.10 の直前	ここで, $t - x - 1$ とおいた.	ここで, $t = -x - 1$ とおいた.
p.23, 定義 1.14	このとき, $x = g(y)$ を f の	また, $x = g(y)$ を f の
p.33, 2 行目	$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x+h)^n - x^n}{h} =$	$(x^n)' = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x+h)^n - x^n}{h} =$
p.34, 例題 2.2 の解答	<p>また, $0 < x < 2$ のとき, $f(x) = -x^2(x-2)$, $f(1) = 0$ なので, $h < 0$ として,</p> $f'_-(2) = \lim_{h \rightarrow +0} \frac{f(2+h) - f(2)}{h} = \lim_{h \rightarrow -0} \frac{1}{h} (-(2+h)^2(2+h-2) - 0)$ $= - \lim_{h \rightarrow -0} (2+h)^2 = -4$ <p>である. よって, $f'_+(2) \neq f'_-(2)$ なので, $f(x)$ は $x = 1$ で微分可能ではない.</p>	<p>また, $0 < x < 2$ のとき, $f(x) = -x^2(x-2)$, $f(2) = 0$ なので, $h < 0$ として,</p> $f'_-(2) = \lim_{h \rightarrow -0} \frac{f(2+h) - f(2)}{h} = \lim_{h \rightarrow -0} \frac{1}{h} (-(2+h)^2(2+h-2) - 0)$ $= - \lim_{h \rightarrow -0} (2+h)^2 = -4$ <p>である. よって, $f'_+(2) \neq f'_-(2)$ なので, $f(x)$ は $x = 2$ で微分可能ではない.</p>
p.40 の側注に注意を追加		<p>【注意】 例題 2.8(2) において, $f(x) = \sin^{-1} \sqrt{1-x^2}$ は $x = 0$ で微分不可能である. 実際, $f'_+(0) = \lim_{x \rightarrow +0} \left(-\frac{1}{\sqrt{1-x^2}} \right) = -1 \neq 1 = \lim_{x \rightarrow -0} \frac{1}{\sqrt{1-x^2}} = f'_-(0)$ である.</p>
p.41, 定義 2.5	であるという. このとき, $f(x)$ は C^∞ 級であるという.	であるといい, $f(x)$ は C^∞ 級であるという.
p.41 の側注		[三角関数の合成] と [sin と cos の関係] を次ページ例題 2.10 の側注へ移動.
p.43, 例題 2.11 の解答の後半	$= (-1)^n e^{-x} \{x^3 - 3nx^2 + 3n(n-1)x - n(n-1)(n-2)\}$ <p>よって,</p>	$= (-1)^{n-3} e^{-x} \{-x^3 + 3nx^2 - 3n(n-1)x + n(n-1)(n-2)\}$ <p>よって,</p>

	誤	正
p.44, 例題 2.12 の解答	<p>n が偶数のとき, $n = 2k(k \geq 0)$ として</p> $f^{(2k)}(0) = -2k(2k-1)f^{(2k-2)}(0) = (-1)^2 2k(2k-1)(2k-2)(2k-3)f^{(2k-4)}(0)$ $\dots = (-1)^k (2k)!f(0) = 0$ <p>また, n が奇数のとき, $n = 2k+1(k \geq 0)$ として</p> $f^{(2k+1)}(0) = -(2k+1)(2k)f^{(2k-1)}(0) = (-1)^2 (2k+1)2k(2k-1)(2k-2)f^{(2k-3)}(0)$ $\dots = (-1)^k (2k+1)!f'(0) = (-1)^k (2k+1)!$	<p>n が偶数のとき, $n = 2k(k \geq 0)$ として</p> $f^{(2k)}(0) = -2k(2k-1)f^{(2k-2)}(0) = (-1)^2 2k(2k-1)(2k-2)(2k-3)f^{(2k-4)}(0)$ $= \dots = (-1)^k (2k)!f(0) = 0$ <p>また, n が奇数のとき, $n = 2k+1(k \geq 0)$ として</p> $f^{(2k+1)}(0) = -(2k+1)(2k)f^{(2k-1)}(0) = (-1)^2 (2k+1)2k(2k-1)(2k-2)f^{(2k-3)}(0)$ $= \dots = (-1)^k (2k+1)!f'(0) = (-1)^k (2k+1)!$
p.53, 例題 3.1 の証明	$a > b$ のときは同様に, $\sin a - \sin b = f'(c_2)(a - b)$ となる.	$a > b$ のときは同様に, $\sin a - \sin b = f'(c_2)(a - b)$ となる $c_2 \in (b, a)$ が存在する.
p.64, 2 行目	「4 次まで」と指定されているので, 4 次導関数まで事前に求めておく.	「4 次まで」と指定されているので, 第 4 次導関数まで事前に求めておく.
p.64, 下から 5 行目	(3) (1) や (2) のように導関数を求めてもよいが, p.60 の主な関数の近似式を使うと,	(3) (1) や (2) のように導関数を求めてもよいが, 例題 3.7 の結果を使うと,
p.68, 例題 3.11 の問題	开区間 $(-\pi, \pi)$ において, $f(x) = (\cos x)^{\frac{2}{3}}$ の極値を求めよ.	开区間 $(-\pi, \pi)$ において, $f(x) = \sqrt[3]{\cos^2 x}$ の極値を求めよ.

	誤	正																																																												
p.68, 例題 3.11 の解答	$f'(x) = \frac{2}{3}(\cos x)^{-\frac{1}{3}} \cdot (-\sin x) = -\frac{2 \sin x}{3(\cos x)^{\frac{1}{3}}} \quad \left(x \neq -\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}\right)$ <p>なので, $f'(-\frac{\pi}{2}), f'(\frac{\pi}{2})$ は存在せず, また, $f'(0) = 0$ である. そこで, 増減表を書くと,</p> <table border="1"> <tr> <td>x</td> <td>$-\pi$</td> <td>\cdots</td> <td>$-\frac{\pi}{2}$</td> <td>\cdots</td> <td>0</td> <td>\cdots</td> <td>$\frac{\pi}{2}$</td> <td>\cdots</td> <td>π</td> </tr> <tr> <td>$f'(x)$</td> <td></td> <td>$-$</td> <td>∞</td> <td>$+$</td> <td>0</td> <td>$-$</td> <td>∞</td> <td>$+$</td> <td></td> </tr> <tr> <td>$f(x)$</td> <td>1</td> <td>\searrow</td> <td>0</td> <td>\nearrow</td> <td>1</td> <td>\searrow</td> <td>0</td> <td>\nearrow</td> <td>1</td> </tr> </table> <p>となるので, $f(x)$ は $x = -\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}$ において極小値 $f(-\frac{\pi}{2}) = f(\frac{\pi}{2}) = 0$ をとり, $x = 0$ において極大値 $f(0) = 1$ をとる.</p>	x	$-\pi$	\cdots	$-\frac{\pi}{2}$	\cdots	0	\cdots	$\frac{\pi}{2}$	\cdots	π	$f'(x)$		$-$	∞	$+$	0	$-$	∞	$+$		$f(x)$	1	\searrow	0	\nearrow	1	\searrow	0	\nearrow	1	<p>$\cos x > 0$, つまり, $-\frac{\pi}{2} < x < \frac{\pi}{2}$ のとき, $f(x) = (\cos x)^{\frac{2}{3}}$ として,</p> $f'(x) = \frac{2}{3}(\cos x)^{-\frac{1}{3}} \cdot (-\sin x) = -\frac{2 \sin x}{3(\cos x)^{\frac{1}{3}}} \left(\frac{\cos x}{\cos x}\right) = -\frac{2 \sin x \cos x}{3\sqrt[3]{\cos^4 x}}$ <p>$\cos x < 0$, つまり, $\frac{\pi}{2} < x < \pi$ かつ $-\pi < x < -\frac{\pi}{2}$ のとき, $f(x) = (-\cos x)^{\frac{2}{3}}$ として,</p> $f'(x) = \frac{2}{3}(-\cos x)^{-\frac{1}{3}} \cdot (\sin x) = \frac{2 \sin x}{3(-\cos x)^{\frac{1}{3}}} \left(\frac{-\cos x}{-\cos x}\right) = -\frac{2 \sin x \cos x}{3\sqrt[3]{\cos^4 x}}$ <p>なので, $f'(-\frac{\pi}{2}), f'(\frac{\pi}{2})$ は存在せず, また, $f'(0) = 0$ である. そこで, 増減表を書くと,</p> <table border="1"> <tr> <td>x</td> <td>$-\pi$</td> <td>\cdots</td> <td>$-\frac{\pi}{2}$</td> <td>\cdots</td> <td>0</td> <td>\cdots</td> <td>$\frac{\pi}{2}$</td> <td>\cdots</td> <td>π</td> </tr> <tr> <td>$f'(x)$</td> <td></td> <td>$-$</td> <td>$\pm\infty$</td> <td>$+$</td> <td>0</td> <td>$-$</td> <td>$\pm\infty$</td> <td>$+$</td> <td></td> </tr> <tr> <td>$f(x)$</td> <td>1</td> <td>\searrow</td> <td>0</td> <td>\nearrow</td> <td>1</td> <td>\searrow</td> <td>0</td> <td>\nearrow</td> <td>1</td> </tr> </table> <p>となるので, $f(x)$ は $x = -\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}$ において極小値 $f(-\frac{\pi}{2}) = f(\frac{\pi}{2}) = 0$ をとり, $x = 0$ において極大値 $f(0) = 1$ をとる.</p>	x	$-\pi$	\cdots	$-\frac{\pi}{2}$	\cdots	0	\cdots	$\frac{\pi}{2}$	\cdots	π	$f'(x)$		$-$	$\pm\infty$	$+$	0	$-$	$\pm\infty$	$+$		$f(x)$	1	\searrow	0	\nearrow	1	\searrow	0	\nearrow	1
x	$-\pi$	\cdots	$-\frac{\pi}{2}$	\cdots	0	\cdots	$\frac{\pi}{2}$	\cdots	π																																																					
$f'(x)$		$-$	∞	$+$	0	$-$	∞	$+$																																																						
$f(x)$	1	\searrow	0	\nearrow	1	\searrow	0	\nearrow	1																																																					
x	$-\pi$	\cdots	$-\frac{\pi}{2}$	\cdots	0	\cdots	$\frac{\pi}{2}$	\cdots	π																																																					
$f'(x)$		$-$	$\pm\infty$	$+$	0	$-$	$\pm\infty$	$+$																																																						
$f(x)$	1	\searrow	0	\nearrow	1	\searrow	0	\nearrow	1																																																					
p.73, [グラフを描く手順]	(5) 必要に応じて, グラフの漸近挙動, 例えば, $x \rightarrow \pm\infty$ や $f(x) \rightarrow \pm\infty$ の付近での極限, を調べる.	(5) 必要に応じて, 漸近線 (asymptote, asymptotic line) を求める. なお, グラフが限りなく近づく直線をそのグラフの漸近線という. 関数 $y = f(x)$ のグラフにおいて, $\lim_{x \rightarrow c+0} f(x), \lim_{x \rightarrow c-0} f(x)$ のうち, 少なくとも一方が ∞ または $-\infty$ のとき, 直線 $x = c$ は漸近線である. また, $\lim_{x \rightarrow \infty} \{f(x) - (ax + b)\} = 0$ または $\lim_{x \rightarrow -\infty} \{f(x) - (ax + b)\} = 0$ ならば, 直線 $y = ax + b$ は漸近線である.																																																												

	誤	正
p.83, 定理 4.1	有界閉区間で連続な関数は積分可能である .	有界閉区間 I で連続な関数 $f(x)$ は I において積分可能である .
p.85, 定理 4.2(4)	(4) $[a, b]$ で $f(x) \geq g(x)$ ならば , $\int_a^b f(x)dx \geq \int_a^b g(x)dx$	(4) 閉区間 $[a, b]$ で $f(x) \geq g(x)$ ならば , $\int_a^b f(x)dx \geq \int_a^b g(x)dx$
p.86, 例題 4.2 に側注を追加 .		【注意】 例題 4.2 の解答では , 高校数学 II, III で学ぶ微分積分学の基本定理 (定理 4.8) を使って $\int_a^b (b-x)^{n-1} dx = -\frac{1}{n} [(b-x)^n]_a^b = -\frac{1}{n} \{(b-b)^n - (b-a)^n\} = \frac{1}{n}(b-a)^n$ と計算している . 分からない人は , いったん読み飛ばし , 第 4.3 節を読んでから見直してください .
p.96, 例題 4.9 の解答 . 問題文に「 C は積分定数」と明記しているので , 解答からは削除 .	以下では , C を積分定数とする .	以下では , C を積分定数とする .
p.97, 例題 4.9 の (3)(4) の解答	<p>なので , 次式を得る .</p> $\int \frac{1}{\sqrt{x^2+A}} dx = \log x + \sqrt{x^2+A} $ <p>(4) $x = a \sin t \left(0 \leq t \leq \frac{\pi}{2}\right)$ とおくと ,</p> $\int \sqrt{a^2-x^2} dx = \int \sqrt{a^2-a^2 \sin^2 t} \frac{dx}{dt} dt = a \int \cos t \cdot a \cos t dt = a^2 \int \cos^2 t dt$ $= \frac{a^2}{2} \int (1 + \cos 2t) dt = \frac{a^2}{2} \left(t + \frac{1}{2} \sin 2t\right) = \frac{1}{2} \left(a^2 \sin^{-1} \frac{x}{a} + x \sqrt{a^2-x^2}\right)$	<p>なので , 次式を得る .</p> $\int \frac{1}{\sqrt{x^2+A}} dx = \log x + \sqrt{x^2+A} + C$ <p>(4) $x = a \sin t \left(0 \leq t \leq \frac{\pi}{2}\right)$ とおくと ,</p> $\int \sqrt{a^2-x^2} dx = \int \sqrt{a^2-a^2 \sin^2 t} \frac{dx}{dt} dt = a \int \cos t \cdot a \cos t dt = a^2 \int \cos^2 t dt$ $= \frac{a^2}{2} \int (1 + \cos 2t) dt = \frac{a^2}{2} \left(t + \frac{1}{2} \sin 2t\right) = \frac{1}{2} \left(a^2 \sin^{-1} \frac{x}{a} + x \sqrt{a^2-x^2}\right) + C$

	誤	正
p.97, 例題 4.10の(3)(4) の解答	<p>(3) $\int \frac{1}{\sqrt{3x^2+2}} dx = \frac{1}{\sqrt{3}} \int \frac{1}{\sqrt{x^2+\frac{2}{3}}} dx = \frac{1}{\sqrt{3}} \log \left x + \sqrt{x^2+\frac{2}{3}} \right$</p> <p>(4) $\int \frac{x^2}{\sqrt{2-x^2}} dx = -\int \frac{2-x^2-2}{\sqrt{2-x^2}} dx = -\int \sqrt{2-x^2} dx + 2 \int \frac{1}{\sqrt{2-x^2}} dx$ $= -\frac{1}{2} \left(x\sqrt{2-x^2} + 2 \sin^{-1} \frac{x}{\sqrt{2}} \right) + 2 \sin^{-1} \frac{x}{\sqrt{2}} = -\frac{1}{2} x\sqrt{2-x^2} + \sin^{-1} \frac{x}{\sqrt{2}}.$</p>	<p>(3) $\int \frac{1}{\sqrt{3x^2+2}} dx = \frac{1}{\sqrt{3}} \int \frac{1}{\sqrt{x^2+\frac{2}{3}}} dx = \frac{1}{\sqrt{3}} \log \left x + \sqrt{x^2+\frac{2}{3}} \right + C$</p> <p>(4) $\int \frac{x^2}{\sqrt{2-x^2}} dx = -\int \frac{2-x^2-2}{\sqrt{2-x^2}} dx = -\int \sqrt{2-x^2} dx + 2 \int \frac{1}{\sqrt{2-x^2}} dx$ $= -\frac{1}{2} \left(x\sqrt{2-x^2} + 2 \sin^{-1} \frac{x}{\sqrt{2}} \right) + 2 \sin^{-1} \frac{x}{\sqrt{2}} = -\frac{1}{2} x\sqrt{2-x^2} + \sin^{-1} \frac{x}{\sqrt{2}} + C.$</p>
p.102, 例題 4.14(4)の解 答	$= \frac{3}{2} \left(x\sqrt{x^2-\frac{4}{9}} - \frac{4}{9} \log \left x + \sqrt{x^2-\frac{4}{9}} \right \right)$	$= \frac{3}{2} \left(x\sqrt{x^2-\frac{4}{9}} - \frac{4}{9} \log \left x + \sqrt{x^2-\frac{4}{9}} \right \right) + C$
p.112, 例題 4.19(3)の解 答	<p>(3) $t = \tan x$ とおけば、</p> $\int \frac{1}{\cos^4 x} dx = \int \frac{1}{\cos^2 x} \frac{1}{\cos^2 x} dx = \int (1 + \tan^2 x) \frac{1}{\cos^2 x} dx = \int (1 + t^2) dt$	<p>$t = \tan x$ とおけば、</p> $\int \frac{1}{\cos^4 x} dx = \int \frac{1}{\cos^2 x} \frac{1}{\cos^2 x} dx = \int (1 + \tan^2 x)^2 dx = \int (1 + t^2)^2 \frac{dt}{1 + t^2}$ $= \int (1 + t^2) dt =$

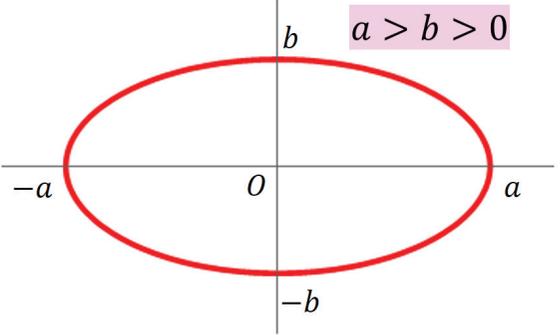
	誤	正
p.113, 定理 4.18 に側注を 追加.		<p>【注意】^{にこうせきぶん}二項積分</p> $\int x^p(ax^q + b)^r dx$ <p>については, 次のように置換すればよいことが知られている.</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. p, q が有理数で, r が整数のとき, $t^s = x$ とおく. ただし, s は p と q の分母の最小公倍数とする. 2. r が有理数で, $\frac{p+1}{q}$ が整数のとき, $t^s = ax^q + b$ とおく. ただし, s は r の正の整数既約分母とする. 3. $\frac{p+1}{q} + r$ が整数のとき, $t^s = a + \frac{b}{x^q}$ とおく. ここで, s は r の正の整数既約分母とする.
p.114, 側注の 【注意】に追 記.	各問題で x を t で表す計算をしている.	各問題で x を t で表す計算をしている. なお, $s = x^4$ とすれば, $ds = 4x^3 dx$ であり, $I = \int \frac{\sqrt{x^4+1}}{x} dx = \frac{1}{4} \int \frac{\sqrt{s+1}}{s} ds$ となるので, I は $R(s, \sqrt{s+1})$ の形である. よって, 例題 4.20(1) では, $t = \sqrt{s+1} = \sqrt{x^4+1}$ とおけばよい.

	誤	正
pp.114-115, 例題 4.20(2) の解答	<p>ここで,</p> $\frac{2t^2}{(t^2-1)^2} = \frac{At+B}{(t+1)^2} + \frac{Ct+D}{(t-1)^2} + \frac{E}{t+1} + \frac{F}{t-1}$ <p>とおくと,</p> $(At+B)(t-1)^2 + (Ct+D)(t+1)^2 + E(t+1)(t-1)^2 + F(t-1)(t+1)^2 = 2t^2$ <p>となる. $A=C=0$ とし, これを使って $t=0, t=1, t=-1$ から得られる方程式を解くと $A=0, B=\frac{1}{2}, C=0, D=\frac{1}{2}, E=-\frac{1}{2}, F=\frac{1}{2}$ となる. よって,</p> $\frac{2t^2}{(t^2-1)^2} = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{(t+1)^2} + \frac{1}{(t-1)^2} - \frac{1}{t+1} + \frac{1}{t-1} \right)$ <p>となるので,</p> $\int \frac{2t^2}{(t^2-1)^2} dt = \frac{1}{2} \int \left(-\frac{1}{t+1} - \frac{1}{t-1} - \log t+1 + \log t-1 \right) dt + C$	<p>ここで,</p> $\frac{2t^2}{(t^2-1)^2} = \frac{A}{(t+1)^2} + \frac{B}{(t-1)^2} + \frac{C}{t+1} + \frac{D}{t-1}$ <p>とおくと,</p> $A(t-1)^2 + B(t+1)^2 + C(t+1)(t-1)^2 + D(t-1)(t+1)^2 = 2t^2$ <p>となる. ここで, t^3 に着目すると $C+D=0$ であり, これと $t=0, t=1, t=-1$ として得られる方程式を連立させて解くと, $A=\frac{1}{2}, B=\frac{1}{2}, C=-\frac{1}{2}, D=\frac{1}{2}$ である. よって,</p> $\frac{2t^2}{(t^2-1)^2} = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{(t+1)^2} + \frac{1}{(t-1)^2} - \frac{1}{t+1} + \frac{1}{t-1} \right)$ <p>となるので,</p> $\int \frac{2t^2}{(t^2-1)^2} dt = \frac{1}{2} \left(-\frac{1}{t+1} - \frac{1}{t-1} - \log t+1 + \log t-1 \right) + C$
p.115, 例題 4.20(4) の解 答	$2 \int \frac{2t^2-1}{(t^2+1)^2} dt = 2 \int \frac{2(t^2+1)-3}{(t^2+1)^2} dt = 4 \tan^{-1} t - 6 \int \frac{1}{(t^2+1)^2} dt$	$2 \int \frac{2t^2-1}{(t^2+1)^2} dt = 2 \int \frac{2(t^2+1)-3}{(t^2+1)^2} dt = 4 \tan^{-1} t - 6 \int \frac{1}{(t^2+1)^2} dt$
p.126, 例題 5.1 の解答	$= 2 \left(\sin x \cos \frac{\pi}{3} - \sin \frac{\pi}{3} \cos x \right) = \sin \left(x - \frac{\pi}{3} \right)$	$= 2 \left(\sin x \cos \frac{\pi}{3} - \sin \frac{\pi}{3} \cos x \right) = 2 \sin \left(x - \frac{\pi}{3} \right)$

	誤	正
p.129, 最上 部の図		x 軸と y 軸の交点に原点を表す「 O 」を追記
p.129, 例題 5.3	$\sqrt{x^2 + y^2} = a\left(1 + \frac{x}{r}\right) (a > 0)$ の極方程式 $r = f(\theta)$ を求め,	$\sqrt{x^2 + y^2} = a\left(1 + \frac{x}{\sqrt{x^2 + y^2}}\right) (a > 0)$ の極方程式 $r = f(\theta)$ を求め,
p.130, 例題 5.3 の解答	$\frac{1}{2}S = \frac{1}{2} \int_0^\pi f^2(\theta) d\theta = \frac{1}{2} \int_0^\pi a^2(1 + \cos\theta)^2 d\theta$	$\frac{1}{2}S = \frac{1}{2} \int_0^\pi \{f(\theta)\}^2 d\theta = \frac{1}{2} \int_0^\pi a^2(1 + \cos\theta)^2 d\theta$
p.131, 定理 5.4. 表記を定 理 5.3 に合わ せる.	<p>1. $C : x = \varphi(t), y = \psi(t) (\alpha \leq t \leq \beta)$ のとき, $\varphi(t), \psi(t)$ が $[\alpha, \beta]$ で C^1 級ならば,</p> $l = \int_\alpha^\beta \sqrt{\varphi'(t)^2 + \psi'(t)^2} dt = \int_\alpha^\beta \sqrt{\left(\frac{dx}{dt}\right)^2 + \left(\frac{dy}{dt}\right)^2} dt$ <p>2. $C : y = f(x) (a \leq x \leq b)$ のとき, $f(x)$ が $[a, b]$ で C^1 級ならば,</p> $l = \int_a^b \sqrt{1 + f'(x)^2} dx = \int_a^b \sqrt{1 + \left(\frac{dy}{dx}\right)^2} dx$ <p>3. $C : r = f(\theta) (\alpha \leq \theta \leq \beta)$ のとき, $f(\theta)$ が $[\alpha, \beta]$ で C^1 級ならば,</p> $l = \int_\alpha^\beta \sqrt{f(\theta)^2 + f'(\theta)^2} d\theta = \int_\alpha^\beta \sqrt{r^2 + \left(\frac{dr}{d\theta}\right)^2} d\theta$	<p>1. $C : x = \varphi(t), y = \psi(t) (\alpha \leq t \leq \beta)$ のとき, $\varphi(t), \psi(t)$ が $[\alpha, \beta]$ で C^1 級ならば,</p> $l = \int_\alpha^\beta \sqrt{\{\varphi'(t)\}^2 + \{\psi'(t)\}^2} dt = \int_\alpha^\beta \sqrt{\left(\frac{dx}{dt}\right)^2 + \left(\frac{dy}{dt}\right)^2} dt$ <p>2. $C : y = f(x) (a \leq x \leq b)$ のとき, $f(x)$ が $[a, b]$ で C^1 級ならば,</p> $l = \int_a^b \sqrt{1 + \{f'(x)\}^2} dx = \int_a^b \sqrt{1 + \left(\frac{dy}{dx}\right)^2} dx$ <p>3. $C : r = f(\theta) (\alpha \leq \theta \leq \beta)$ のとき, $f(\theta)$ が $[\alpha, \beta]$ で C^1 級ならば,</p> $l = \int_\alpha^\beta \sqrt{\{f(\theta)\}^2 + \{f'(\theta)\}^2} d\theta = \int_\alpha^\beta \sqrt{r^2 + \left(\frac{dr}{d\theta}\right)^2} d\theta$

	誤	正
p.131, 定理 5.4 の証明 . 表記を定理 5.3 に合わせる .	$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n P_{i-1}P_i &= \sum_{i=1}^n \sqrt{(\varphi(t_i) - \varphi(t_{i-1}))^2 + (\psi(t_i) - \psi(t_{i-1}))^2} \\ &= \sum_{i=1}^n \sqrt{\varphi'(\xi_i)^2 + \psi'(\eta_i)^2}(t_i - t_{i-1}) \\ &\rightarrow \int_{\alpha}^{\beta} \sqrt{\varphi'(t)^2 + \psi'(t)^2} dt \quad (\Delta \rightarrow 0) \end{aligned}$	$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n P_{i-1}P_i &= \sum_{i=1}^n \sqrt{\{\varphi(t_i) - \varphi(t_{i-1})\}^2 + \{\psi(t_i) - \psi(t_{i-1})\}^2} \\ &= \sum_{i=1}^n \sqrt{\{\varphi'(\xi_i)\}^2 + \{\psi'(\eta_i)\}^2}(t_i - t_{i-1}) \\ &\rightarrow \int_{\alpha}^{\beta} \sqrt{\{\varphi'(t)\}^2 + \{\psi'(t)\}^2} dt \quad (\Delta \rightarrow 0) \end{aligned}$
p.133, 側注 [定理 5.6 の説明]	$f(x) \geq 0$ の場合	$f(x) \geq 0$ の場合
p.137, 3 行目, 説明を追加 .	以下, 右辺の極限值が存在するとき, 左辺の広義積分を右辺の極限值で定義する . また, 右辺の極限值が存在しなければ, 広義積分は存在しないことになる .	以下, 右辺の極限值が存在するとき, 左辺の広義積分を右辺の極限值で定義する . また, 右辺の極限值が存在しなければ, 広義積分は存在しないことになる . なお, (iii) と (iv) において, ε と ε' は独立であることに注意されたい .
p.137, 例題 5.7(1) の解答	(1) $x \rightarrow 0$ のとき, $\log x \rightarrow -\infty$ となるので, $I = \int_0^1 x \log x dx$ は広義積分である . $f(x)$ は十分小さな $\varepsilon > 0$ に対して $[\varepsilon, 1]$ で連続なので, $I = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \int_{\varepsilon}^1 x \log x dx = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \left[\frac{1}{2} x^2 \log x \right]_{\varepsilon}^1 - \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \int_{\varepsilon}^1 \frac{1}{2} x dx$	(1) $f(x) = x \log x$ としたとき, $f(0)$ は定義されていないことに注意する . そして, $x \rightarrow 0$ のとき, $\log x \rightarrow -\infty$ となるので, $I = \int_0^1 x \log x dx$ は広義積分である . $f(x)$ は十分小さな $\varepsilon > 0$ に対して $[\varepsilon, 1]$ で連続なので, $I = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \int_{\varepsilon}^1 x \log x dx = \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \left[\frac{1}{2} x^2 \log x \right]_{\varepsilon}^1 - \lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \int_{\varepsilon}^1 \frac{1}{2} x dx$

	誤	正
p.138, 側注, [よくある間違い]	ε と ε' は独立なのに, $\varepsilon = \varepsilon'$ とした	ε と ε' は独立なのに, $\varepsilon = \varepsilon'$ とした
p.138, 例題 5.7(3) の解答	$= \sin^{-1} 1 - \sin^{-1}(-1) = \frac{\pi}{2} - \left(-\frac{\pi}{2}\right) = \pi$	$= \sin^{-1} \mathbf{1} - \sin^{-1}(-1) = \frac{\pi}{2} - \left(-\frac{\pi}{2}\right) = \pi$
p.138, 説明を 追加.	先ほどと同様, 以下, 右辺の極限值が存在するとき, 左辺の広義積分を右辺の極限值で定義する.	先ほどと同様, 以下, 右辺の極限值が存在するとき, 左辺の広義積分を右辺の極限值で定義する. ここで, $M, M', \varepsilon, \varepsilon', \varepsilon''$ は独立であることに注意されたい.
p.139, 例題 5.8(3) の解答	(3) $t = \sqrt{x^2 - 1}$ とおくと, $t^2 = x^2 - 1$ なので $t dt = x dx$ であり, $x: 1 \rightarrow \infty$ のとき, $t: 0 \rightarrow \infty$ である. ここで, C を積分定数としたとき, $\int \frac{1}{x\sqrt{x^2 - 1}} dx = \int \frac{1}{x \cdot t} \cdot \frac{t}{x} dt = \int \frac{1}{x^2} dt = \int \frac{1}{t^2 + 1} dt + C$ となることに注意すれば, $\int_1^\infty \frac{1}{x\sqrt{x^2 - 1}} dx = \lim_{M \rightarrow \infty} \int_0^M \frac{1}{1 + t^2} dt = \lim_{M \rightarrow \infty} \left[\tan^{-1} t \right]_0^M$	(3) $t = \sqrt{x^2 - 1}$ とおくと, $t^2 = x^2 - 1$ なので $t dt = x dx$ であり, $x: 1 \rightarrow \infty$ のとき, $t: 0 \rightarrow \infty$ である. よって, ここで, C を積分定数としたとき, $\int \frac{1}{x\sqrt{x^2 - 1}} dx = \int \frac{1}{x \cdot t} \cdot \frac{t}{x} dt = \int \frac{1}{x^2} dt = \int \frac{1}{t^2 + 1} dt \neq C$ となることに注意すれば, $\int_1^\infty \frac{1}{x\sqrt{x^2 - 1}} dx = \lim_{M \rightarrow \infty} \int_0^M \frac{1}{1 + t^2} dt = \lim_{M \rightarrow \infty} \left[\tan^{-1} t \right]_0^M$

	誤	正
p.141, 例題 5.9(2) の解答	<p>(2) $f(x) = \frac{\log x}{x}$ は $x \geq 2$ で非負の単調減少な連続関数で, $f(n) = \frac{\log n}{n}$ なので, 積分判定法が利用できる. ここで,</p> $\int_2^\infty \frac{\log x}{x} dx = \lim_{M \rightarrow \infty} \int_2^M \frac{\log x}{x} dx = \lim_{M \rightarrow \infty} \frac{1}{2} ((\log M)^2 - (\log 2)^2) = \infty$ <p>となるので, 積分判定法より, $\sum_{n=2}^\infty \frac{\log n}{n}$ は発散する.</p>	<p>(2) 問 3.11(2) より, $f(x) = \frac{\log x}{x}$ は $x \geq 3$ で非負の単調減少な連続関数で, $f(n) = \frac{\log n}{n}$ なので, 積分判定法が利用できる. ここで,</p> $\int_3^\infty \frac{\log x}{x} dx = \lim_{M \rightarrow \infty} \int_3^M \frac{\log x}{x} dx = \lim_{M \rightarrow \infty} \frac{1}{2} ((\log M)^2 - (\log 3)^2) = \infty$ <p>となるので, 積分判定法より, $\sum_{n=3}^\infty \frac{\log n}{n}$ は発散する. この級数に1つの項 $\frac{\log 2}{2}$ を付け加えても, 級数の収束・発散は変わらないので, $\sum_{n=2}^\infty \frac{\log n}{n}$ も発散する.</p>
p.148, 例題 6.1 の側注に 追加		<p><small>だえん</small> [楕円の方程式] $\frac{x^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} = 1$ $a > b > 0$ のとき, 長軸の長さは $2a$, 短軸の長さは $2b$ となる.</p> 

	誤	正
p.150, 例題 6.2の解答(2)	$= \sin^2 \theta \cos^2 \theta \lim_{r \rightarrow 0} r^2 \rightarrow 0$	$= \sin^2 \theta \cos^2 \theta \lim_{r \rightarrow 0} r^2 = 0$
p.150, 例題 6.2の解答(4)	<p>(4) $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ とおくと, $\cos^3 \leq 1$ より \cos^3 であることに注意すれば,</p> $\begin{aligned} \lim_{(x,y) \rightarrow (0,0)} \frac{x^3 - 3xy}{x^2 + y^2} &= \lim_{r \rightarrow 0} \frac{r^3 \cos^3 \theta - 3r^2 \sin \theta \cos \theta}{r^2(\cos^2 \theta + \sin^2 \theta)} \\ &= \cos^3 \theta \lim_{r \rightarrow 0} -\frac{3}{2} \sin 2\theta = -\frac{3}{2} \sin 2\theta \end{aligned}$	<p>(4) $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ とおくと, $\cos^3 \theta \leq 1$ より $\cos^3 \theta$ は有限値なので,</p> $\begin{aligned} \lim_{(x,y) \rightarrow (0,0)} \frac{x^3 - 3xy}{x^2 + y^2} &= \lim_{r \rightarrow 0} \frac{r^3 \cos^3 \theta - 3r^2 \sin \theta \cos \theta}{r^2(\cos^2 \theta + \sin^2 \theta)} \\ &= \cancel{\cos^3 \theta} \lim_{r \rightarrow 0} -\frac{3}{2} \sin 2\theta = -\frac{3}{2} \sin 2\theta \end{aligned}$
p.151, 例題 6.3の解答	<p>よって, $\lim_{(x,y) \rightarrow (2,3)} f(x,y) = 1 = f(2,3)$ なので, $f(x,y)$ は原点 $(0,0)$ で連続である.</p> <p>(2) $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ とおけば,</p> $\lim_{r \rightarrow 0} \frac{x^3 - xy}{x^2 + y^2} = \lim_{r \rightarrow 0} \frac{r^3 \cos^3 \theta - r^2 \sin \theta \cos \theta}{r^2}$	<p>よって, $\lim_{(x,y) \rightarrow (2,3)} f(x,y) = 1 = f(2,3)$ なので, $f(x,y)$ は点 $(2,3)$ で連続である.</p> <p>(2) $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ とおけば,</p> $\lim_{(x,y) \rightarrow (0,0)} \frac{x^3 - xy}{x^2 + y^2} = \lim_{r \rightarrow 0} \frac{r^3 \cos^3 \theta - r^2 \sin \theta \cos \theta}{r^2}$

	誤	正
p.152, 定義 6.6	<p>2変数関数 $f(x, y)$ に対して, 極限值</p> $f_x(a, b) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a+h, b) - f(a, b)}{h}$ <p>が存在するとき, $f(x, y)$ は点 (a, b) で x について偏微分可能 (partially differentiable with respect to x) といい, この値を x についての偏微分係数 (partial differential coefficient) と呼び, $f_x(a, b)$ または $\frac{\partial f}{\partial x}(a, b)$ と表す. 同様に, 極限值</p> $\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a, b+h) - f(a, b)}{h}$ <p>が存在するとき, $f(x, y)$ は点 (a, b) で y について偏微分可能といい, この値を $f_y(a, b)$ または $\frac{\partial f}{\partial y}(a, b)$ と表す. また, この値を y についての偏微分係数という.</p>	<p>2変数関数 $f(x, y)$ に対して, 極限值</p> $f_x(a, b) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a+h, b) - f(a, b)}{h}$ <p>が存在するとき, $f(x, y)$ は点 (a, b) で x について偏微分可能 (partially differentiable with respect to x) といい, この値を x についての偏微分係数 (partial differential coefficient) と呼び, 左辺の記号 $f_x(a, b)$ または $\frac{\partial f}{\partial x}(a, b)$ と表す. 同様に, 極限值</p> $f_y(a, b) = \lim_{k \rightarrow 0} \frac{f(a, b+k) - f(a, b)}{k}$ <p>が存在するとき, $f(x, y)$ は点 (a, b) で y について偏微分可能といい, この値を 左辺の記号 $f_y(a, b)$ または $\frac{\partial f}{\partial y}(a, b)$ と表す. また, この値を y についての偏微分係数という.</p>
p.152, 図, x 軸方向の曲線を延長する		

	誤	正
p.158, 定理 6.2 の証明	$f_x(a, b) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a+h, b) - f(a, b)}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{Ah + o(h)}{h} = A$ <p>$A = f_x(a, b)$ を得る . 同様に , $h = 0, k \rightarrow 0$ とすると , $B = f_y(a, b)$ を得る .</p>	$f_x(a, b) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(a+h, b) - f(a, b)}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{Ah + o(h)}{h} = A$ <p>なので , $A = f_x(a, b)$ を得る . 同様に , $h = 0, k \rightarrow 0$ とすると , $B = f_y(a, b)$ を得る .</p>
p.161, 問 6.9 の後	<p>$z = f(x, y)$ が全微分可能ならば , (6.5) および定理 6.2 より</p> $f(x + \Delta x, y + \Delta y) - f(x, y) = f_x(x, y)\Delta x + f_y(x, y)\Delta y + o(\sqrt{(\Delta x)^2 + (\Delta y)^2})$ <p>が成り立つ .</p>	<p>$z = f(x, y)$ が全微分可能ならば , 系 6.1 より</p> $f(x + \Delta x, y + \Delta y) - f(x, y) = f_x(x, y)\Delta x + f_y(x, y)\Delta y + o(\sqrt{(\Delta x)^2 + (\Delta y)^2}) \quad ((\Delta x, \Delta y) \rightarrow (0, 0))$ <p>が成り立つ .</p>
p.161, 定義 6.13 の側注に 追記		<p>[全微分を使った近似計算] 全微分を使って $3.01^3 \times 1.98^4$ を求めよう . $f(x, y) = x^3 y^4$ とすれば , $3.01^3 \times 1.98^4 = f(3 + 0.01, 2 - 0.02)$ であり , $df = 3x^2 y^4 dx + 4x^3 y^3 dy$ なので , $x = 3, y = 2, dx = 0.01, dy = -0.02$ とすれば , $df = 3 \times 3^2 \times 2^4 \times 0.01 + 4 \times 3^3 \times 2^3 \times (-0.02) = 4.32 - 17.28 = -12.96$ なので , 近似値として $f(3 + 0.01, 2 - 0.02) = f(3, 2) + df = 3^3 \times 2^4 - 12.96 = 419.04$ を得る . ちなみに , $3.01^3 \times 1.98^4 = 419.141$ である .</p>
p.164, 例題 6.12 に側注を 追加		<p>【注意】例題 6.12, 6.13 のように第 2 次導関数を求めさせる問題の場合 , 特に断りがなければ , $z = f(x, y)$ は C^2 級だと考えてよい . したがって , $z_{xy} = z_{yx}$ が成り立つとしてよい .</p>
p.170, 演習問 題 6.7(1) の解 答	$x + y + z - 3 = 0$	$x + y + z - 3 = 0, x + y - z = 3$

	誤	正
p.173, 例題 7.1の解答	$f(x, y) = \sqrt{4+x+y}$ と表すとき, $f_x = f_y = \frac{1}{2}(4+x+y)^{-\frac{1}{2}}$, $f_{xx} = f_{yy} = z_{xy} = -\frac{1}{4}(4+x+y)^{-\frac{3}{2}}$, なので,	$f(x, y) = \sqrt{4+x+y}$ と表すとき, $f_x = f_y = \frac{1}{2}(4+x+y)^{-\frac{1}{2}}$, $f_{xx} = f_{yy} = f_{xy} = -\frac{1}{4}(4+x+y)^{-\frac{3}{2}}$, なので,
p.174, 定理 7.5の証明	$F(x) = f(x, b)$ は x の関数として $x = a$ で広義の極値をとるので,	$F(x) = f(x, b)$ は x の関数として $x = a$ で 広義の 極値をとるので,
p.176, 3行目	例えば, $x^2 + y^2 - 1 = 0$ のとき, ある $a(-1 < a < 1)$ に対して, 2つの値 $y_1 = \sqrt{1-a^2}$ と $y = -\sqrt{1-a^2}$ が対応しているので, y は x の関数ではない.	例えば, $x^2 + y^2 - 1 = 0$ のとき, ある $x = a(-1 < a < 1)$ に対して, 2つの値 $y_1 = \sqrt{1-a^2}$ と $y_2 = -\sqrt{1-a^2}$ が対応しているので, y は x の関数ではない.
p.176, 定義 7.3の後	例えば, $F(x, y) = x^3 + y^3 + (\log x)(\log y) + e^{\frac{x}{1+xy}} = 0$ から, 陰関数 $y = f(x)$ を具体的に求めることはできないし, そもそも存在するかどうか分からない.	例えば, $F(x, y) = x^3 + y^3 + (\log x)(\log y) + e^{\frac{x}{1+xy}} = 0$ を満たす陰関数 $y = f(x)$ を具体的に求めることはできないし, そもそも存在するかどうか分からない.
p.177, 例題 7.3の解答	(1) $F(x, y) = e^{xy} + e^x - e^y$ とすれば,	(*) $F(x, y) = e^{xy} + e^x - e^y$ とすれば,
p.178, 例題 7.4の解答, f を F へ変更	$x = 2$ のとき, $y^2 = 16$ より $y = \pm 4$ となるが, $y \leq 0$ より $x = 2$ となる点は $(2, -4)$ である. $f(x, y) = x^3 + 2x^2 - y^2$ とおくと, $f_x(x, y) = 3x^2 + 4x$, $f_y(x, y) = -2y$ なので, 点 $(2, -4)$ における接線の方程式は $f_x(2, -4)(x-2) + f_y(2, -4)(y+4) = 0$ より,	$x = 2$ のとき, $y^2 = 16$ より $y = \pm 4$ となるが, $y \leq 0$ より $x = 2$ となる点は $(2, -4)$ である. $F(x, y) = x^3 + 2x^2 - y^2$ とおくと, $F_x(x, y) = 3x^2 + 4x$, $F_y(x, y) = -2y$ なので, 点 $(2, -4)$ における接線の方程式は $F_x(2, -4)(x-2) + F_y(2, -4)(y+4) = 0$ より,
p.179, 例題 7.5の解答, ステップ3	$F_{xx}(x, y) = 12x^2 + 4$ より, $F_{xx}(0, 0) = F_{xx}(0, 1) = F_{xx}(0, -1) = 4$ なので,	$F_{xx}(x, y) = 12x^2 + 4$ より, $F_{xx}(0, 0) = F_{xx}(0, 1) = F_{xx}(0, -1) = 4$ であり,
p.179, 例題 7.5の【アク ティブ・ラー ニング】を追 加		【アクティブ・ラーニング】 ある学生が, (7.9) を満たす点 (a, b) を求めた. そして, この学生は, この点が $F_y(a, b) = 0$ を満たしたため, 定理 7.9 より, 陰関数 $y = f(x)$ は $x = a$ において極値はとらない, と判定した. この考え方は正しいか? みんなで話し合ってみよう.

	誤	正
p.180, 例題 7.6の側注	[7.6のグラフ]	[例題 7.6のグラフ]
p.181, 例題 7.6の解答	(1) (ステップ1) 定理 7.10 に基づいて極値点の候補を探す	(1) (ステップ1) 定理 7.10 に基づいて極値点の候補を探す
p.181の側注	1変数関数の極値問題に帰着させ, 定理 3.12 を用いて極値の判定をする. あるいは, 極値の定義に基づいて, 極値の判定をする.	1変数関数の極値問題に帰着させ, 定理 3.12 を用いて極値の判定をする. あるいは, 極値の定義に基づいて, 極値の判定をする. 後者の場合, $g(a+s, b+t) = 0$ を満たす 0 でない実数 s, t に対して, $f(a+s, b+t) - f(a, b)$ の符号を調べればよい. 具体例については, 例えば, 文献 [13] の例 5.33 を参照のこと.
p.181, 側注を 最後に追加		<p>【アクティブ・ラーニング】</p> <p>ある学生が, 定理 7.6 を使って, 例題 7.6 の極値判定を次のようにした. この考え方は正しいか? みんなで話し合ってみよう.</p> <p>$f_{xx}(x, y) = 2, f_{xy}(x, y) = f_{yx}(x, y) = 0, f_{yy}(x, y) = 2$ より,</p> $H\left(\frac{1}{\sqrt{2}}, \sqrt{2}\right) = \begin{vmatrix} 2 & 0 \\ 0 & 2 \end{vmatrix} = 4 > 0$ <p>かつ $f_{xx}\left(\frac{1}{\sqrt{2}}, \sqrt{2}\right) = 2 > 0$ である. よって, 定理 7.6(1) より, $F(x) = f(x, \psi(x))$ は点 $\left(\frac{1}{\sqrt{2}}, \sqrt{2}\right)$ で極小値 $f\left(\frac{1}{\sqrt{2}}, \sqrt{2}\right) = \left(\frac{1}{\sqrt{2}}\right)^2 + (\sqrt{2})^2 = \frac{5}{2}$ をとる.</p>

	誤	正
p.184, 演習 7.1(2) の解答	(2) $x + 2y - \frac{1}{6}(x + 2y)^3 + \dots$	(2) $1 + (x - y) + (x - y)^2 + (x - y)^3 + \dots$
p.191, 一番下 の図		
p.193, 側注を ページの先頭 に追加		[基本テクニック] 重積分の計算では, なるべく積分領域を図示する.
p.193, 例題 8.3 の解答	(2)	(2) 側注の図のように積分領域を2つの領域 D_1 と D_2 に分ける.
p.195, §8.3	そのために, 変数 t の区間 $[\alpha, \beta]$ から x の区間 $[a, b]$ への C^1 級関数 $x = \varphi(t)$ があるとす. このとき,	そのために, 変数 t の区間 $[\alpha, \beta]$ から x の区間 $[a, b]$ への全単射な C^1 級関数 $x = \varphi(t)$ があるとす. このとき,

	誤	正
p.195, §8.3 に側注を追加		<p>[写像] 集合 A から集合 B への写像(mapping) f とは, 集合 A の任意の要素 x に対して集合 B の要素 y をただ 1 つ対応づける「規則」のことである. このとき,</p> $f: A \rightarrow B \text{ とか } y = f(x)$ <p>と表す. $f: A \rightarrow B$ であるとき, 集合 A を写像 f の定義域(domain), B を f の値域(range) という. 関数は, 数の集合に値をもつ写像である.</p> <p>[1対1の写像] 写像 $f: A \rightarrow B$ が条件「$x \neq y$ ならば $f(x) \neq f(y)$」を満たすとき, f は単射(injection) あるいは 1対1の写像 (one-to-one mapping) であるという. 単射の対偶をとれば, 「$f(x) = f(y)$ ならば $x = y$」となるので, これを単射の定義にしてもよい.</p> <p>[上への写像] 写像 $f: A \rightarrow B$ が条件「任意の $y \in B$ に対して $y = f(x)$ となる $x \in A$ が存在する」を満たすとき, f は全射(surjection) あるいは上への写像 (onto-mapping) という.</p> <p>[全単射] f が単射かつ全射のとき, f は全単射(bijection) であるという. f が全単射, 別の言い方をすれば, f が上への 1対1写像のとき, 任意の $y \in B$ に対して, $y = f(x)$ となる $x \in A$ がただ一つ存在する.</p>
p.198, 定理 8.10	$D = \{(x, y) \mid a \leq x \leq b, \varphi_1(x) \leq y \leq \varphi_2(x)\}$ とし, 関数 $f(x, y), g(x, y)$ が D において連続で, $f(x, y) \leq g(x, y)$ とする.	$D = \{(x, y) \mid a \leq x \leq b, \varphi_1(x) \leq y \leq \varphi_2(x)\}$ とし, 関数 $f(x, y), g(x, y)$ が D において連続で, $g(x, y) \leq f(x, y)$ とする.
p.199, 例題 8.6(1) 別解	<p>(別解) 対称性を考慮しない場合は, $D = \{(x, y) \mid x^2 + y^2 \leq a^2\}$ とし, 上面が $z = \sqrt{a^2 - x^2}$, 下面が $z = -\sqrt{a^2 - x^2}$ であることに注意し, 次のようにする.</p> $V = \iint_D \left\{ \sqrt{a^2 - x^2} - \left(-\sqrt{a^2 - x^2} \right) \right\} dx dy = 2 \iint_D \sqrt{a^2 - x^2} dx dy$ $= 2 \int_{-a}^a \left(\int_{-\sqrt{a^2 - x^2}}^{\sqrt{a^2 - x^2}} \sqrt{a^2 - x^2} dy \right) dx = 4 \int_{-a}^a (a^2 - x^2) dx = \frac{16}{3} a^2$	<p>(別解) 対称性を考慮しない場合は, $D = \{(x, y) \mid x^2 + y^2 \leq a^2\}$ とし, 上面が $z = \sqrt{a^2 - y^2}$, 下面が $z = -\sqrt{a^2 - y^2}$ であることに注意して, 次のようにする.</p> $V = \iint_D \left\{ \sqrt{a^2 - y^2} - \left(-\sqrt{a^2 - y^2} \right) \right\} dx dy = 2 \iint_D \sqrt{a^2 - y^2} dx dy$ $= 2 \int_{-a}^a \left(\int_{-\sqrt{a^2 - y^2}}^{\sqrt{a^2 - y^2}} \sqrt{a^2 - y^2} dx \right) dy = 4 \int_{-a}^a (a^2 - y^2) dy = \frac{16}{3} a^2$

	誤	正
p.200, 脚注	$x = ar \cos \theta, y = br \sin \theta$ のときのヤコビアンは , $J = \begin{vmatrix} a \cos \theta & -ar \sin \theta \\ b \sin \theta & br \cos \theta \end{vmatrix}$ $= abr \cos^2 \theta + abr \sin^2 \theta$ $= abr$	$x = ar \cos \theta, y = br \sin \theta$ のときのヤコビアンは , $J = \begin{vmatrix} x_r & x_\theta \\ y_r & y_\theta \end{vmatrix}$ $= \begin{vmatrix} a \cos \theta & -ar \sin \theta \\ b \sin \theta & br \cos \theta \end{vmatrix}$ $= abr \cos^2 \theta + abr \sin^2 \theta$ $= abr$
p.201,3 行目	$S(\Delta) = \sum_{j=1}^n E_j = \sum_{j=1}^n \frac{ D_j }{\cos \theta_j} = \sum_{j=1}^n \sqrt{f_x(x_j, y_j)^2 + f_y(x_j, y_j)^2 + 1}$ $\rightarrow \iint_D \sqrt{f_x(x, y)^2 + f_y(x, y)^2 + 1} dx dy \quad (\Delta \rightarrow 0)$	$S(\Delta) = \sum_{j=1}^n E_j = \sum_{j=1}^n \frac{ D_j }{\cos \theta_j} = \sum_{j=1}^n \sqrt{f_x(x_j, y_j)^2 + f_y(x_j, y_j)^2 + 1} D_j $ $\rightarrow \iint_D \sqrt{f_x(x, y)^2 + f_y(x, y)^2 + 1} dx dy \quad (\Delta \rightarrow 0)$
p.201, 例題 8.7(2) の解答	$S = 2 \iint_D \sqrt{z_x^2 + z_y^2 + 1} dx dy = 2 \iint_D f(x) \frac{\sqrt{f'(x)^2 + 1}}{\sqrt{f(x)^2 - y^2}} dx dy$ $= 4 \int_a^b \left(\int_0^{ f(x) } f(x) \frac{\sqrt{f'(x)^2 + 1}}{\sqrt{f(x)^2 - y^2}} dy \right) dx$ $= 4 \int_a^b f(x) \sqrt{f'(x)^2 + 1} \left[\sin^{-1} \frac{y}{ f(x) } \right]_0^{ f(x) } dx$ $= 2\pi \int_a^b f(x) \sqrt{1 + f'(x)^2} dx$	$S = 2 \iint_D \sqrt{z_x^2 + z_y^2 + 1} dx dy = 2 \iint_D f(x) \frac{\sqrt{f'(x)^2 + 1}}{\sqrt{f(x)^2 - y^2}} dx dy$ $= 4 \int_a^b \left(\int_0^{ f(x) } f(x) \frac{\sqrt{f'(x)^2 + 1}}{\sqrt{f(x)^2 - y^2}} dy \right) dx$ $= 4 \int_a^b f(x) \sqrt{f'(x)^2 + 1} \left[\sin^{-1} \frac{y}{ f(x) } \right]_0^{ f(x) } dx$ $= 2\pi \int_a^b f(x) \sqrt{1 + f'(x)^2} dx$

	誤	正
p.201, 例題 8.7 の側注に追記		【注意】例題 8.7(2) の結果は、定理 5.7 と同じである。
p.203, 1 行目	が存在すれば、 $f(x,y)$ は D 上で重積分可能であり、広義積分は I となる。	が存在すれば、 $f(x,y)$ は D 上で重積分可能であり、広義重積分は I となる。
p.203 の図、右図の + を - に変更。		

	誤	正
p.203, 例題 8.8 に側注を 追加		<p>【注意】例えば，例題 8.8(1) では，形式的に</p> $\int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-(x^2+y^2)} dx dy = \int_0^{2\pi} \int_0^{\infty} e^{-r^2} r dr d\theta$ $= 2\pi \left[-\frac{1}{2} e^{-r^2} \right]_0^{\infty} = \pi$ <p>と計算できる．しかし，大学院入試や編入学試験等において，近似列に基づく極限操作を省略すると，減点される場合があるため，なるべく近似列に基づいた計算をした方がよい．この点は，例題 5.7 の【注意】と同じである．</p>
p.208, 問 8.5(2) の解答	$D = \{(x, y) \mid x^2 + y^2 \leq 4\}, 2 \iint_D \sqrt{9 - x^2 - y^2} dx dy = \frac{4}{3} \pi (9 - 5\sqrt{5})$	$D = \{(x, y) \mid x^2 + y^2 \leq 4\}, 2 \iint_D \sqrt{9 - x^2 - y^2} dx dy = \frac{4}{3} \pi (27 - 5\sqrt{5})$